幼児に漢字を教えるのはいけないことなのか

昭和四十二年の四月、大阪市を中心とする十いくつかの幼稚園によって始められた“石井方式による漢字教育”は、今では、数多くの幼稚園や保育園によって、約二万人に及ぶ園児に実施されています。

このことについて、「“かな文字を学習させるのもまだ早い”という意見さえある幼稚園教育に、漢字を学習させるとは何事か。乱暴もはなはだしい。」という声が起こるだろうということは、当然、私の予期していたところです。

果たせるかな。ある幼稚園の園長さんが、顔色を変えて、「私は、幼稚園で、かなを学習させるということにも反対意見をもっているものです。まして、漢字を幼児に学習させるなどということは、とんでもない暴挙で、絶対に許せないことだと思います。」と、私に食ってかかりました。

「そうおっしゃるのは、まことにごもっともなことだと思います。実は、私も先生と同じ意見で、“今、多くの幼稚園が行なっているようなかな文字教育は早すぎる”という考え方をしています。

それはさておき、まあ一つ、私にだまされたと思って、二十分ほどでよろしい。園児を私に貸してください。私の“漢字教育”というものを、実際にお目にかけたいと思います。指導の実際をご覧いただいた上で、良い悪いのご意見をおっしゃっていただきたい、と思います。」

お話をしながら出てくる“人物”や“動物”“品物”“事柄”などを漢字で黒板に書きつける

と私は答えました。

そこで、その幼稚園の園児たちを、四歳児と五歳児と合わせて四クラスほど、いっぺんに講堂に集めてもらい、“漢字教育”を始めました。

私の言う“漢字教育”とは、こういうことなのです。

子供たちに向かって、「これから、先生は、皆さんにおもしろいお話をしてあげます。」と言って、おとぎ話を始めます。

その時、お話をしながら、その話の中に出てくる、おもな“人物”や“動物”“品物”“事柄”などを、漢字で黒板に書きつけていきます。お話は、十分か十五分くらいで終わります。その間に黒板に書きつけられる漢字は、全部でおよそ三十字くらい。それで黒板は漢字でいっぱいになります。

話に先立って、「漢字を書きますよ。」とも「漢字を教えます。」とも言いません。ただ話をしながら、さり気なく漢字を書きつけていくのです。

黒板に書きつける漢字は、お話の中にたびたび繰り返されて出てくる言葉を選びます。そして、その言葉が出てくるたびに、その言葉を使う時に、その言葉に当たる漢字を指さします。これも、やはりさり気なく、自然に行ないます。

この時、幼児たちは、話を聞こうと、私のほうに心も目も集中させていますので、私の手の動きに従って、自然と指さす漢字に目をやります。

ただこれだけのことで、子供たちは、黒板の漢字を、話される言葉と結びつけ、「猿」という漢字は「さる」と読むのだなと理解し、覚えてしまうのです。

これは、実際を見たことのない人には、まず信じていただけないことだと思います。お話が終わって、さて、黒板に書き並べられてある漢字を、一字一字、子供たちに尋ねます。すると、子供たちは、「そんな漢字は、とっくの昔に覚えているよ。」といわんばかりの顔をして、すらすらっと読んでしまいます。

幼児は漢字指導をしなくても覚えてしまう

黒板いっぱいに書きつけられた漢字を全部、間違いなく読みます。順序を変えて、どの漢字を指さしてみても、ためらわずに正しく読むのです。

念のために申し上げますが、私は、子供たちに、ただ、「お話をしてあげます。」と言ってお話をしただけであって、決して、「漢字を教えてあげます。」とも、まして、「漢字を書くからこれを覚えなさい。」などとは絶対に言いませんでした。

ただお話をしながら、里板に漢字を書きつけていっただけで、いわゆる“漢字指導”というようなことは、決していたしません。それにもかかわらず、黒板に書きつけられた漢字が、何と読む字であるかを、覚えてしまうのです。

この時も、園児たちは、どの漢字も元気よくすらすらと読んでいきました。黒板にいっぱい書きつけられた漢字、三十字ほどもある漢字を、どれを指さしてみても、皆、少しのためらいもなく元気に読みました。

私は、その間、時々園長さんの顔をうかがいました。すると、きらきらと輝く園長さんの目が、漢字をすらすらと読んでいく子供たちの姿に痛いほど強く注がれていて、息を殺し、身動きもしないでご覧になっている様子が、私の目に映りました。

さて、指導が終って、私が園長室の椅子に座った時、開口一番、園長さんの口をついて出てきた言葉は、「石井先生、私の幼稚園でも、この漢字教育をぜひやらせていただきます。」という言葉でした。

その言葉や態度には、つい半ときほど前の、非難を露骨に表わしたそれとはうって変わって、心からこの教育を推進してみたいという、熱意と意欲とが満ちあふれていました。

それから、「幼児の漢字を覚える能力が、こんなにすばらしいものであろうとは、今の今まで全く考えてもみませんでした。ほんとうに夢でも見るような気待ちです「園長さんはしみじみとした調子でそう語りました。